『江島縁起』考

服部清道

「江の島」乃至「江岸神社」の名が一般に知られたのは中世期以後のことと理解されている。ついで近世期に入ってひろく庶民の信仰をあつめ、且つ遊覧の名所ともなった。そして近世に入ると、そのような機運を利用して、これを一層ひろく世に紹介しようとする社会性的な意図に、さらに商業的な意欲も加味されて、商業主義に沿った江の島また江の島弁才天にちなんだ様々なたぐいの書物が数多く編述され出版された。地誌や案内記の類を別にして、およそ江島縁起ということに限定するとその種類は限られたものになるが、さらにそれを大別すると、仮名本系と真名本系とになる。就中、その主流をなすものは、仮名本としては江島神社蔵本の『江嶋縁起』と岩本楼蔵本の『江嶋五巻縁起』とが一般に知られている。ともに巻子五巻本である。他方、真名本としては江島神社蔵本の『江嶋縁起』がはやく知られていた。金沢文庫蔵本は、その奥書に「昭和二十六年四月購入」とあるところから、極く最近の所蔵であることが知られる。

江島神社所蔵の真名本『江嶋縁起』は巻子仕立てである。その粗末な箱蓋表書に「江島縁起一軸」とあるほかは、添書もなく、折紙もついていない。全巻二四紙。やゝ上質の楮紙様の料紙で縦32.7cm、横55.5～60.0cm大のものを二四枚継いでいる。罫は天地、行罫ともに朱単線で、縦28.5cm、行間はおおむね5.8cm。行罫は各紙一五行に割ってい

るが、第一四紙だけが一六行である。それは、これまでの各紙が一六行に僅かづつあましていたものを、ここにまとめて一行に割り出したためである。また終紙は一四行で、残り一行分は軸の糊しろにしている。これは、結果的には、本文はさきの八行で終り、余白四行を置いて、最後の二行を奥書きに充てたということになるが、写しに際しての工夫であったと思われる。

書写の体裁は各行一四乃至一八字詰の行書体である。就中、一五字と一六字詰めが最も多く、一四字詰は僅少である。首紙は一一罫とし、罫外に四行分の余白を置き、第第一行に寄せて題名を書いている。その題名は永年にわたる累度の披見のためであろう、磨損して、僅かに「縁起」の偏「糸」「走」を残し、「江嶋」の二字は全く失なわれて後筆をもって「縁起」の旁とともに補っている。

江島神社には、これとは別に、新写一本を所蔵している。美濃判型の冊子一巻本で、表紙の内書きに東大史料編纂所某氏が書写したことが示されている。さきの巻子本を臨写し、冊子仕立てに装禎している。またさきの巻子本は一紙一五行宛であるが、これでは一丁十二行に改められている。

金沢文庫蔵本は胡蝶装、桝形本で、全一帖であったらしい。縦15.0cm、横11.3cmという中型で、表紙とも全二六丁を数えるが、前後部に可成りの脱落があるようである。書題は『相州津村江之島縁起』とあるが、これはもとより後筆であって、近いころ、この本の旧蔵者が、その内容から仮題したとも考えられる。

書写の体裁は、書体は行書で、各丁罫線なく、半丁五行宛、毎行の字詰は九字、一〇字、一一字、一二字などと混淆していて、半丁五行の定め以外は、字詰についての規制なしに書写したようである。本文は、現装禎による限り、初丁裏（初めの一行を缺く）二行目からはじまり、二七丁表に終っている。したがって、後筆の書題は初丁の表に記るされ、最終の二七丁裏にあたるところに「元亨三年九月十五日写了」と奥書がある。

真名本『江島縁起』は、さきにのべたように、金沢文庫本と江島神社本とはその装禎を異にし、また書題名を異にしているものの、その内容はほとんど等しい。金沢文庫所蔵本は前後に欠失があることはすでに述べたが、江島神社蔵本と書題名が違っている原因ともなっているわけであるが、それで両本の間にどれほどの異同があるか、また金沢文庫本の欠失、乱丁がどこにあるかを具体的にする必要があろうと思うので、両本の全文をかかげて比較することとした。なお、『江島縁起』本文下の数字は同縁起の行順である。

相州津村江之島縁起（金沢文庫本）

江島神社蔵「江島島縁起」巻首

江嶋縁起（江島神社本）

大日本國東海道相模國江嶋者天龍　（初紙）
八部の所造　辨才天女之靈體也。謹撿
霊嶋先起者　房蔵相三箇國之境　鎌倉
與海月郡之間　有四十里之湖水　号淙澤。其
湖水爲體　水滔々四山逆影　雲霧鎮埋谿
犲狼満岡　若人到時者　黒風拂梢　白浪咽岸
而間人跡更絶湖邊。爰有猛悪之龍　即五頭
一身之龍王也、屢ト湖水爲栖。自神武天皇
御宇至于人王十一代垂仁天皇之御宇
七百余年之間　彼悪龍伴風伯鬼魅山神
等逕國土爲災害。所謂崩山出洪水　損物　（二紙）
成病痾乱逆。第十二代景行天皇治六十
年之間　悪龍於東國常降大雨。依之國民
以石窟爲人屋。二十一代安康天皇御宇
龍鬼詫圓大臣令成悪事。事廿六代武烈天

皇之御宇龍気託金村大臣令成乱逆。此
時五頭龍初出現湖水之南山之谷津村
水門初噉食人児。仍時人此所名初噉澤
西岳号江野。此澤者湖水之水門　南海之
入江也。谷前有女長者　生十六人之子　爲毒
龍被噉食乎。於茲長者咽愁苦之思　辞
旧宅遷住西里　名長者塚。悪龍漸遍村里
呑食人児之間　邑里之人民怖畏捨離住所
移越他所　世人此所云子死越。龍噉人既及
八箇國　被呑親者子悲　被呑子者親悲　村
南村北哭聲不絶　児別母　夫別妻。爰八箇國　（三紙）
之貴賤衆人相儀、以児周備毒龍之贄。凡
貴賤男女啼哭之聲不断絶。於茲人王三
十代欽明天皇第十三年壬申四月十二日
戌尅　至同廿三日辰尅　當江野之南海湖
水之水門　雲霞暗蔽海上　日夜大地振動
天女雲上顕現　童子左右侍立　諸天龍神

水火雷電山神鬼魅夜叉羅刹従雲上
降盤石　自海底挙沙石電光耀天火焔
交雑白浪。同廿三日及辰剋雲去霞散見
海上顕出嶋山蒼波之間神現山新也。十二鵜
降居嶋上　依之思云鵜来嶋。々上天女降　形
貌殊妙耀麗質　於金窟。是即辨才天女之
應作　魚熱池龍王第三之娘也。於茲五頭
龍見　是天女之麗質爲通志於天女　凌波
渡嶋到天女所卜欲念。天女答云　我有本　（四紙）
誓　愍念有情　汝無慚愧横害於生命　形
與心共我不相似　更不可通。龍言　我随教
命自今以後永停凶害　心禁断殺生。願垂
哀愍　令我得遂宿念。于時天女肯。爰龍
随順天女教誡　發誓向南成山。世人是名龍
口山　又号子死方明神。弁才天以方便之力
爲降伏龍之猛悪　救護衆生故　所化作嶋也。
垂権迹天女也。是号江嶋明神。

34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

一役優婆塞　俗姓賀茂氏。大和國葛城郡
茅原村人也。聖德六年正月一日誕生。々
已最初唱云
我本立誓願　欲令一切衆　如我等無異
如我昔所願　今者爲滿足　化一切衆生
皆令入佛道
又行者三歲之時父母問兒云　先生誰乎。
答云
見我身者發菩提心　聞我名者斷惑修善
聽我說者得大智恵　知我心者即心成佛
自七歲不問人讀誦心經　依經力隨順國
土之鬼神　又智深悟廣而崇三寶有求
法志　住葛城山三十余年　居石室之中　着
藤衣　食松葉　顯精進浴淨水洗心垢　誦孔
雀明王咒　顯得露驗　或垂紫雲　通仙室
或召仕諸鬼神　汲水拾薪魚不隨者。又
召集諸神鬼云　葛城與金峰山之間石橋

（五紙）

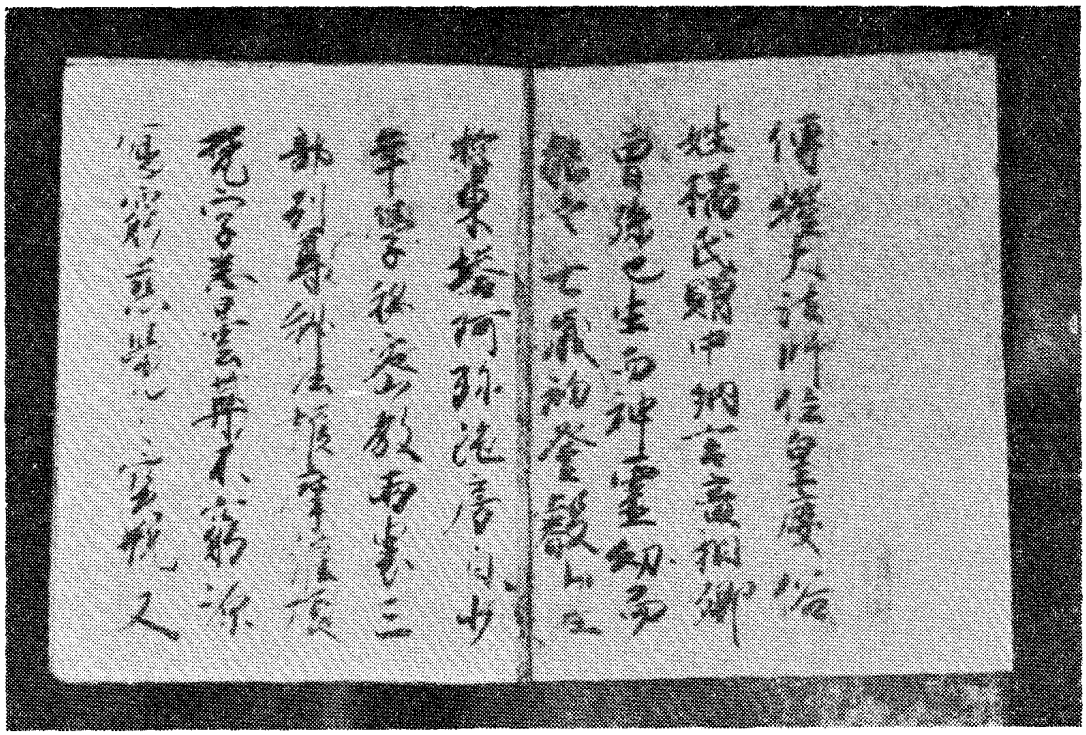
51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67

作者爲通道責仰諸鬼神運大石作調
渡始。一言主明神言畫形醜夜度云夜石
作調。行者召取一言主明神之有何
恥可隠形云何不作渡乎。即以神咒縛一
言主神　擲置幽谷底。爰一言主文武天皇　（六紙）
讒言　優婆塞成謀為傾国家。帝驚遣
勅使令召取飛空行者畢。然間令召取
行者母為替。行者自出来　即文武天皇
三年己亥五月被流伊豆大嶋。海上踏如陸飛
空如鳥。雖然盡恐怖違勅之罪　居嶋夜往
詣富士峰　祈浅間大菩薩　言所願者、只
嶋許於天遅被赦免罪云云　同四年庚子夏四月
行者在嶋　遙望北海空中紫雲浮。便尋
雲所起之處　蒼海北岸江嶋之西山金窟上
也。因此行者窟中所止致勇猛精神勤憶
念請冥感　發願言我承冥應来至。於此
願聖尊現真身利益世間。如是致請七日

68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84

85 專念誦不動明王咒。而及第七日後夜時
86 分窟中香雲自然周遍光明照耀　應時
87 忽然天女現前化現。々質八臂之尊體也。容　（七紙）
88 儀白浄祥潔猶秋月。發妙音言説　従無
89 量劫来成就善方便　普済苦衆生多所大
90 饒益。於茲行者歓喜合掌　重請求加被。
91 天女言
92 我収化於鷲峰垂跡於此嶋。當知擁護國
93 王及人民為除裏患会得安穏也。汝為利益
94 長夜故願求　我化現　實是大悲者。爰行者
95 見天女身　稟承神教　稽首敬礼　為鎮護國
96 土　以一尺八寸之利剣安置舎窟之第二重之
97 内院。是辨才天顕現之最初也。
98 元正天皇養老七年癸亥　自春三月泰澄大師
99 住江嶋　読誦大乗経　念誦陀羅尼　専一心精
100 進并毎日乗船詣龍口山施與法楽　祈離業
101 證果。而於龍口山之間有二池　大師毎日為

法楽。一池書写光明真言入池底　是名光　（八紙）
明真言池。一池書阿弥陀佛六字名号入池
中　是号阿弥陀池。如是施與法楽経日月之
間　明神謁對大師言
我受菩薩之法施　洗除三熱之悩垢　獲得宿
明智　既智舊徳之先處也。豈生悪心乎。雖
然国土逆人出来者　斬頸懸我前。是非昔
日之凶執　屢静海内之凶賊　為除逆人於萬里。
又重説偈曰
我是大光普照尊　為度邪見衆生政
普門之中示逆跡　令（今）於此所現龍口（五巻縁起）
泰澄承神之霊託　不錯神言令披露
自爾以降逆人出来　時者截頸懸山前　始自此
也。其後泰澄住嶋専行妙法一心不乱　發
願云　唯願妙辨才顕示神威利益濁世。於此
同秋九月十五日夜半窟中自然彩雲起、光　（九紙）



金沢文庫本真名縁起巻首

明普照　忽然天女　化現　更不知従来處。泰澄
拝見天女生身　圓満心願出嶋。至于天平六年甲戌
相模國餘綾郡之人　道智法師居嶋読誦法
華　更不問時節　久近漸歴年序差盡数
部之間　為聴法故毎日天女来至備飯味。於此
道智為怪異　為知由来故取藤皮作縷付
針差着天女之裳裾。然後曳縷尋行到龍窟
見縷着龍尾　龍窟之中有甚傷音。又有忿
怒聲云　龍女汝心軽養供法師（供養（五巻縁起））　遇此傷苦。道智
聞音戦慄　欲避走。争堪怖畏乎。而龍言未訖

118 119 120 121 122 123 124 125 126 127

（初丁裏）

傳統大法師位皇慶。俗
姓橘氏。贈中納言廣相卿・
曽孫也。生而神霊　幼而
能言。七歳初登叡山　住

（二丁表）

於東塔阿弥陀房。自少
年学秘密教　両界三
部別尊秘法護摩灌頂
梵字悉曇　莫不窮源
窮慈覚之寶瓶。又

（二丁裏）

就東寺明師景曇阿闍
梨受彼宗灌頂大道。
就中於神王法者諸流
十三家同傳之。以為已心重

暴風起聲揚　白浪漫里四十里也。波浪漂流
道智之身直置龍口山頂。爰龍女誓言　自今
以後我山藤不令生　又法師勿令参住耳。
弘法大師諱空海。讃岐国多度郡人。俗姓佐伯
氏。寶亀五年甲已経十二月誕生。而生年五　（一〇紙）

六之間　夢常見居坐八葉蓮華之中　諸佛
共語也。及于年十五　正暦七年入京　初逢石渕
贈僧正勤操　学習大虚空蔵幷能満虚空
蔵聞持召入心念持。後経遊大学　或攀踏阿波
国大龍之嶽修行　或於土佐室戸崎幽谷勤念
應聲明星来影　自此直解日新。聖年廿二得

度。延暦廿三年五月十二日入唐。其年八月到
福州　着岸。十二月下旬到長安城。廿四年仲
春十二　大唐貞元廿一年准勅配住西明寺

128 129 130 131 132 138 134 135 136 137 138 139 140 141

寶　為筥底亀鏡。於茲
（三丁表）
阿闍梨。六月上旬入学法
灌頂壇。即沐五智灌頂。七
月上旬臨金剛界大曼荼
羅　重受五部灌頂。八月上
旬忽得傳法阿闍梨位之
（三丁裏）
灌頂　学習胎蔵金剛両
部秘密法及毘盧遮那金剛
頂経等　並請来経律論
疏章傳記已上二百一十六部
四百六十巻　佛菩薩金剛天
（四丁表）
等像　三昧耶曼荼羅　法
曼荼羅　傳法阿闍梨等影
及道具　阿闍梨付囑物等。

永忠和尚故院。爰則周遊諸寺訪擇師。即　142
遭青龍寺恵果阿闍梨六月上旬入学法　143
灌頂壇。即沐五智灌頂。七月上旬臨金剛界　144
大曼荼羅　重受五部灌頂。八月上旬忽得傳法　145
阿闍梨位之灌頂　学習胎蔵金剛両部秘密　146
法及毗盧遮那金剛頂経等。至請来経論疏章　（一一紙）　147
傳記已上二百一十六部四百六十巻　佛菩薩金剛　148
天等像　三昧耶曼荼羅法曼荼羅　傳法阿闍梨　149
等影及道具。阿闍梨付屬等。大同元年丙戌八月　150

大同元年丙戌八月帰来本朝
啓秘密之門弘大日之化。爰
（四丁裏）
弘仁五年甲午春二月上旬為
拝聖跡趣向東海。同三
月三日泊相州津村之水
門。此日遙向南海観見
霊嶋　至誠憶念。應時於
（五丁表）
嶋山頂浮綵雲　々上顕現
金龍。大師弥信敬翌日
乗一葉之船着嶋　往詣
于金窟。即窟中安坐七
日夜　専心不散致請言　唯
（五丁裏）
願智慧弁才天顕彰生

帰来本朝　啓秘密之門　弘大日之化。爰弘仁五年甲午
春二月上旬。為拝聖跡趣向東海。同三月三日
泊相州津村之水門。此日遙向南海観見霊嶋。
至誠憶念。應時於嶋山頂浮彩雲　々上顕現
金龍。大師弥信敬翌日乗一葉之船着嶋　往
詣于金窟。即窟中安坐七日夜　専心不散致
請言　唯願智恵辨才天影影生身久住世擁護

151　152　153　154　155　156　157

身　久住世擁護国土及利
益万民令得安穏。於此第
七日之夜及刁尅　窟中自
然廣博厳浄　綵雲遍布
（六丁表）
光明普照。應時天女法然
現前　其躰八臂具足　相好
光明猶如満月輪　威徳巍
巍　梵釋左右侍立。自出
和音言説
（六丁裏）
今此三界　皆是我有　其中衆生
悉是吾子　而今此處　多諸患難
唯我一人　能為救護
大師面見天女之真身。以至誠
心請問治国撫民之要術。
（七丁表）

国土及利益萬民令得安穏。於此第七日之夜及寅
剋。窟中自然廣博厳浄　彩雲遍布　光明普照。
159　160
應時天女法然現前　其體八臂具足　相好光明猶
如満月輪　成徳巍々　梵釋左右侍立。自出和音
言説
161　162
今此三界皆是我有　其中衆王悉是吾子　（一二紙）
而今此處多諸患難　唯我一人能為救護
163　164
大師面見天女之真身　以至誠心請問治国撫民之
要術。天女言　若国土諸災難襄悩悪病異怨起
165　166

天女言　若国土諸災難襄悩
悪病異怨起時　先将使我
山鳴動。此時専讃説三部
妙典者　我以大勢神力消除
災難　及召呼四大王衆大龍
（七丁裏）
鬼神等擁護国土。爰大師
恭敬合掌称讃天女言
敬礼々々世間。尊。於諸母中最為勝
三種世間咸供養　面貌容儀人楽観
種々妙徳以厳身　目如修廣青蓮葉。
（八丁表）
福智光明名称満　譬如無價。末尼珠
我今讃歎最勝者　悉能成弁所求心
真実功徳妙吉祥　譬如蓮花・極・清浄
身色端厳皆楽・見　衆相希有不思儀・
能放無垢智光明　於諸念中為最勝

時　先将使我山鳴動。此時専讃説三部妙典
者　我以大勢神力消除災難　及召呼四大王衆
天龍鬼神等擁護国土。爰大師恭敬合掌
稱讃天女言
敬礼敬礼世尊。間。於諸母中最為勝
三種世間咸供養　面貌容儀人楽観
種々妙徳以厳身　目如修廣青蓮華。
福智光明名称満　譬如無價摩。尼珠
我今讃歎最勝者　悉能成辨所求心
真実功徳妙吉祥　譬如蓮華・遊・清浄
身色端厳皆示・見　衆相希有不思議・
（一三紙）
能放無垢智光明　於諸念中為最勝

178　177　176　175　174　373　172　171　170　169　168　167

（八丁裏）

猶如師子獸中上　常以八臂自荘厳
端正楽観如満月　言詞无渟出和音
若有衆生心願求　普土随念令円満
帝尺諸天咸供養　皆共称讃可帰依
衆徳能生不思議　一切時中起恭敬

（九丁表）

称讃天女功徳己　為安鎮国土
饒益人民故。自摸刻形像五
指量　并相具五鈷金剛杵　佛
舎利安置金窟之内院両
部之中間　其下埋寶珠形似

（九丁裏）

合子。東西之窟安両部
曼荼羅。金窟之間開社壇。
依之四王諸天龍鬼神等
擁護国土饒益人民。

猶如獅子獸中上　常為八臂自荘厳
端正楽観如満月　言詞無滞出和音
若有衆生心願求　普土隠念令円満
帝釋諸天咸供養　皆共称讃可帰衣
衆徳能生不思議　一切時中起恭敬

179 180 181 182 183

称讃天女功徳己　安鎮国土饒益人
184
故自摸刻形像五指量　并相具五鈷金剛
185
杵　佛舎利安置金窟之内院両部之中間
186

其下埋寶形似合子。東西之窟安置両
187

部曼荼羅。金窟之間開社壇。依之四王諸天
188

龍衆鬼神等擁護国土饒益人民。
189

慈覚大師諱圓仁。俗姓壬
（一〇丁表）
生氏。下野国都賀郡人也。
其先祖崇神天皇第一皇
子豊城入彦苗裔也焉。
延暦十三年誕生。是日紫雲
覆屋上。于時同郡大慈寺廣智
（一〇丁裏）
菩薩遙望紫雲。尋雲檀越
壬生氏家也。訪問之家婦産児。
廣智中心悦　誠其父母加教誨。
苦令養。顧及年九歳屬廣智
登経蔵誓攫法文得観世音
（一一丁表）
経心甚悦。年十有五登叡山
入傳教之室。天長年中及年
四十　於首楞厳院三年練行

慈覚大師諱圓仁。俗姓壬生氏。下野国都
賀部人也。其先祖崇神天皇第一皇子豊城
入彦苗裔也焉。延暦十三年誕生。是日紫　（一四紙）
雲覆屋上。于時同郡大慈寺廣智菩薩
遙望紫雲。尋雲壇越壬生氏家也。訪問之家
嫁産児。廣智忠悦　誠其父母加教誨。苦
全養。顧及年九歳屬廣智　登経蔵誓槐法
文得観世音経　心甚悦。年十有五登叡山入
傳教之室。天長年中及四十　於首楞厳院三
年練行　書写法華経一部。承和五年六月

190 191 192 193 194 195 196 197 198 199

書写法花経一部。承和五年
六月廿二日解纜進発　七月二日
（一一丁裏）
得着大唐揚州。初住開元
寺。冬十月攀踏天台山及五
臺山巡礼諸聖跡　初遇高
僧宗叡幷全雅等。於揚
府所得念誦教法経論章
（一二丁表）
疏等一百九十八巻　両部曼
荼羅諸尊壇様高僧真
影佛舎利等二十一種也。次
到大興善寺翻経院謁對
元政阿闍梨學金剛界。明年
（一二丁裏）
至青龍寺従義真阿闍梨
入胎蔵界　幷受蘇悉地大

廿二日解纜進発　七月二日得着大唐揚州。
初住開元寺。冬十月攀踏天台山及五臺山　巡
礼諸聖跡　初遇高僧宗叡幷全雅等。於揚府
所得念誦教法経論章疏一百九十八巻　両
部曼荼羅諸尊壇様高僧真影佛舎利等
廿一種也。次到大興善寺翻経院謁對元政
阿闍梨學金剛界。明年至青龍寺従義真阿
闍梨入胎蔵界幷受蘇悉地大法。次向玄法寺従

200 201 202 203 204 205 206 207

法。次向玄法寺従法全阿闍
梨習胎蔵儀軌。凡住長安
六年之間　所得念誦教法
（一三丁表）
経論章疏五百五十九巻　両
部曼荼羅諸尊壇様佛
舎利道具高僧真影等廿
一種也。而承和二年冬夢先
師教曰　汝往大唐就真言門先
（一三丁裏）
問天部　就天台門先問中道云云。
依先師教道円仁謁法全
阿闍梨尋求天部之秘要。法
全告圓仁言　我有諸佛已證
秘法　号曰宇賀弁天。是即
（一四丁表）

法全阿闍梨習胎蔵儀軌。凡住長安六年之間　（一五紙）　208
所得念誦教法論章疏五百五十九巻　両部　209
曼荼羅諸尊檀様佛舎利道具高僧真影　210
等廿一種也。而承和二年冬夢中告先師　211
教曰　汝往大唐就真言門先問天部就天台門先　212
問中道云云。依先師教道圓仁謁法全阿闍梨等　213
求天部之秘要。法全告圓仁言　我有諸佛已證　214
秘法　号曰宇賀辨才。是則究意摩尼輪也。　215

究摩意尼輪也。汝授与
秘要。以此秘法安鎮国土。大
師相承是秘要深納心腑。
其後値南天竺国寶月
三蔵　恵遠和尚　玄鑒和尚等。
（一四丁裏）
会昌七年会昌天子遇破
滅佛法大師顧身悲嘆。夜
夢。先師曰。我守護汝　莫
憂畏。其後軍中諜云　日本
国僧等宜帰本国。於茲大
（一五丁表）
師初出帝京　其秋九月得
着太宰府。今年唐大中元
年。我朝承和十四年也。嘉祥
元年戊辰春奉詔入京。即登
本山礼師跡。其後仁寿三

汝授與秘要。以此秘法安鎮国土。大師相承是
秘要深納心腑。其後値南天竺国寶月三蔵
恵遠和尚　玄鑒和尚等。会昌七年会昌天子遇
破滅佛法。大師顧身悲嘆。夜夢。先師曰。我等
守護汝　莫憂畏。其後軍中諜云　日本国
僧等宜帰本国。於茲大師初出帝京　其秋
九月得着太宰府。今年唐大中元年我
朝承和十四年也。嘉祥元年戊辰春奉　（一六紙）
詔入京。即登本山礼師跡。其後仁寿三

216 217 218 219 220 221 222 223 224

（一五丁裏）

年癸酉春二月為拝聖跡発
向東海。同三月十五日泊相模
国津村水門　遙望南海之
霊嶋　嶋形奇麗峯相連
三台也。爰大師合掌恭敬

（一六丁表）

向嶋凝誠。于時嶋山之頂
五色雲浮弥敬心。即命海
人掉一葉船到嶋。於茲紫
雲漸移西山。随雲攀踏
山尋行之　雲停浮両山之

（一六丁裏）

間。雲下有霊窟　是即龍
神之所在地。大師弥致勇
猛之精勤。専行甚深行處
既経三七日。及訖日　重発願言

年癸酉春二月為拝聖跡　発向東海。同三
月十五日泊相模国津村水門　遙望南海之
霊嶋　々形奇麗峰。相連三台也。爰大師合
掌恭敬　向嶋凝誠。于時嶋山之頂五色雲
浮弥敬心　即命海人棹一葉船到嶋。於茲
紫雲漸移西山。随雲攀踏山尋行之
雲亭浮両山之間。　雲下有霊窟。是即
龍神之所在也。大師弥致勇猛之精勤　専
行甚深行處　既経三七日。及訖日重発願
言　我有宿昔之念　既得拝聖跡　冥感相

225 226 227 228 229 230 231 232 233 234

我有宿昔之念　既得拜聖
（一七丁表）
跡　冥感相應　適見此瑞應。
是往昔之大因縁之所致也。
冀天女那羅延顕現生身
能久安住於世間利益長夜。
於今日後夜時分自龍窟
（一七丁裏）
中紫雲涌出　香気遍　金
光耀天。大師稽首敬礼
更無他縁。于時天女忽然
雲上現前。其形端厳微妙
八臂具足　左天女　右童子侍
（一八丁表）
立。天女発妙音聲言説
我是安養世界主。出彼寶
刹垂跡於此山。當知擁護

應　適見此瑞應。是往昔之大因縁所致也。
冀天女那羅延顕現生身　能久安住於世
間利益長夜。於今日後夜時分自龍窟
中紫雲涌出　香気遍山　金光耀天。大師　（一七紙）
稽首敬礼　更無他縁。于時天女忽然雲上
現前。其形端厳微妙八臂具足　左天女
右童子侍立。天女発妙音聲言説
我是安養世界主。出彼寶刹垂跡於此山。
當知　擁護国王及人民　為除襄患令得

235 236 237 238 239 240 241 242 243

国王及人民　為除襄患令得
安穏故。若国土諸襄悩災
（一八丁裏）
異疫病異怨諸悪事起時
先　将使我山鳴動。此時
専令読誦法花仁王最勝
妙典者　我振大勢力　将使天
災地災隠蔽　及召四王眷属
（一九丁表）
百千鬼神等護持国土除
襄患令得安穏。於茲大師
見生身　并承神教　遂宿
念。為安鎮国土　自刻形像
長五寸并建立五鈷金剛杵
（一九丁裏）
長六寸　破中納三寸之寶
剣并如意寶珠寶剣面

安穏故。若国土諸襄悩災異疫病異怨　244
諸悪事起　時先将使我山鳴動。此時専令　245
読誦法華仁王最勝王等妙典者　我振大　246
勢力　将使天災地災隠蔽　及召四王眷属　247
百箇鬼神等護持国土除襄患令得安　248
穏。於茲大師見生身　并承神教　遂宿念。　249
為安鎮国土　自刻形像長五寸　并建立　250
五鈷金剛杵長六寸　破中納三寸寶剣　251
并如意宝宝珠剣　面書辨才天心中心　252

書弁才天心中心咒梵字也。
五鈷之鬼同納佛舎利四粒　安
置龍窟之中。即命国司
（二〇丁表）
卜東山之頂拂荊蕀　開
社壇　始祭奠也。初天降西
山之金窟　此時移東山。
安然和尚者相模国星谷所
生也。尋慈覚大師之舊儀
（二〇丁裏）
願楽拝見弁才天天女之生
身　元慶五年辛丑春二月十
五日到嶋住石室送春秋修
大法積練行　発願言
唯願世間尊示現生身久
（二一丁表）

咒梵字也。五鈷之鬼同納佛舎梨四粒安置　（一八紙）
龍窟之中。即令国司卜東山之頂　拂荊蕀
開社壇　始祭奠也。初天降西山之金窟　此時
移東山。是号江嶋大明神。
安然和尚者相模国星谷所生也。尋慈覚
大師舊儀。願楽拝見辨才天女之生身
元慶五年辛丑春二月十五日到嶋住石
屋送春秋　修大法積練行　発願言　唯願世
間尊示現生身久利益世間。於茲当七月

253 254 255 256 257 258 259 260 261

利益世間。於茲當七月十五日
夜刁剋石室中香気周遍
光明照地　天女化現相好　光
明微妙　和尚面得見天女之
生身　満足宿念出嶋。
（二一丁裏）
安然和尚記曰
江州水海有霊嶋　名竹生
嶋。生身弁才天住彼嶋。依之
叡岳繁昌　為鎮護国家
之道場。我生国相州南海
（二二丁表）
有雲嶋　号江嶋。生身弁才
天在此嶋　是故此国繁昌
可為国基耳。
安然秘所記曰
西嶋山者名女婦石。是即女

十五日夜刁剋石室中香気遍遍　光明照地
天女化現相好　光明微妙。和尚面得見天女之
生身　満足宿念出嶋。
安然和尚記曰
江州水海有霊嶋　名竹生嶋。生身辨才天
住彼嶋。依而叡岳繁昌　為鎮護国家之道
場。我生国相州南海有霊嶋　號江嶋。生身　（一九紙）
辨才天在此嶋国。是故此国可為繁昌基耳。
安然秘所記曰。
西嶋山者名女婦石。是即女天胎蔵界會

262　263　264　256　266　267　268　269　270　271

天台蔵界會也。嶋西南之岸
有巖窟　名金窟。自窟中
時々放金光。是故名金窟。々
内院二重也。於内院又有二窟。
東窟安胎蔵界曼荼羅

（二三丁表）

西窟安金剛界曼荼羅　弁才
天座其中央。左座龍樹芹。
右座徳善王。其前安瑠璃
壇。々上安置法花経一部。
其前有池。々中有白龍長八寸。

（二三丁裏）

是无熱池之龍王也。此窟即
弁才天根本宝宮也。窟外
院門有八尺倶利迦羅龍王。又有
諸仙女窟。是窟沙竭羅

（二二丁裏）

也。嶋西南之岸有巖窟　窟名金窟。自窟中
時時放金光。是故名金窟。々内院二重也。
於内院又有二窟。東窟安胎蔵界曼
荼羅　西窟安金剛界曼荼羅辨才天
座其中央。左座龍樹菩薩　右座徳善
大王。其前安瑠璃壇。々上安置法華経
一部。其前有池。々中有白龍　長八寸。是
無熱池之龍王也。此窟即辨才天根本宝
宮也。窟外院八尺倶利迦羅龍王。又有
諸仙女住窟。是窟沙竭羅竜王巖窟也。

272 273 274 275 276 277 278 279 280 281

龍王巖窟也。次有巖窟

（二四丁表）

名白龍穴。中有二白龍長

一丈五尺也。又禅定仙人住此。

有悪龍守窟。次有窟池

名龍池。諸龍之住窟也。自

此窟起雲雨。窟之奥際

（二四丁裏）

有地。自地際上五尺余有

圓穴。是辨才天所在之穴也。

前有松　高二尺余。金毘羅

大将鎮住窟上方。

東嶋山者即名男夫石。是男

（二五丁表）

天金剛界會也。嶋西南之山上

有池　名蓮花池。々水口之底

住水火雷電神。池西岸住

次有巖窟。名白龍穴。中有二白龍　長一丈

五尺也。又禅定仙人住此。有悪龍守窟。次

（二〇紙）

有池　名龍池。諸龍之住窟也。自此窟起雲

雨。窟之奥際有池。自池際上五尺余有圓

穴。是辨才天所在之穴也。前有松　高二尺

余。金毘羅大将鎮住窟上方。東嶋山者

即名男夫石。是男天金剛界會也。嶋西南

之山上有池　名蓮華池。々水水口之底住

水火雷電神。池西岸住聖観自在尊。

282 283 284 285 286 287 288 289 290

聖観自在尊。此地阿弥陀佛
化道有縁地也。浴池者　洗
（二五丁裏）
除生死羅垢　得清浄之身。
両山之間有龍穴。是弁才天
自然涌出之窟也。窟中有瀧。
瀧下有池。中有白蛇　長五寸。
是弁才天之應作也。窟門
（二六丁表）
有八尺青龍。是荒御前風
雨神也。自窟中常出白雲。
是国土之祥気也。嶋東海
岸有石嶋。是即聖天生
身躰也。嶋上有白蛇　長八寸。
（二六丁裏）
脣赤色也。欲降雨時　此嶋
鳴動。是名水天嶋。北方有

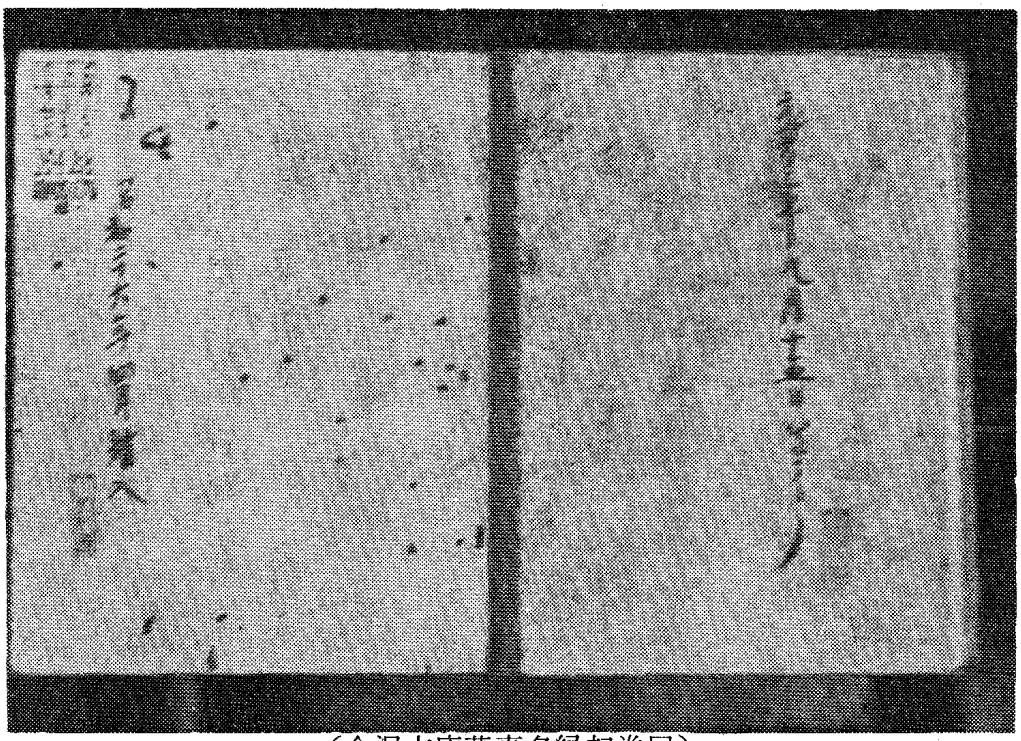
291 此地阿弥陀佛化導有縁地也。浴此池水者
292 洗除生死罪垢得清浄之身。両山之間有
293 龍穴。是辨才天自然涌出之窟也。窟中
294 有瀧。々下有池。々中有白蛇　長五寸。是
295 辨才天之應作也。窟門有八尺龍。是荒
296 御前風雨神也。窟中常出白雲。是国土
297 之神気也。嶋東海岸有石嶋。是即聖天
298 生身體也。嶋上有白蛇　長八寸。脣赤色也。欲（二一紙）
299 降雨時　此嶋鳴動。是名水天嶋。北方有山。是

山。是即吒枳尼天生身之
躰也。五尊吒枳尼也。其形如
五大力菩薩。又東北方之山
（二七丁表）
中有霊石。形躰似河伯名三神石。
又号荒神石。是禍福神鬼
也。第一荒御前也。又廻嶋
有十二巌窟。是即弁才天
所座十二神王也
（二七丁裏）

即叱枳尼天生身之躰也。五尊吒枳尼也。
其形如五大力菩薩。又東北方之山中有霊石。
形體似河伯　名三神石。又號荒神石。是禍
福神鬼也。第一荒神御前也。又廻嶋有十
二巌窟。是則辨才天所座十二神王也

300　301　302　303　304

元亨三年九月十五日写之了



昭和二十六年四月購入

（金沢文庫蔵真名縁起巻尾）

（初丁裏）

傳燈大法師位皇慶　俗
姓橘氏。贈中納言廣相卿
曽孫也。生而神霊　幼而
能言。七歳初登叡山住

（二丁表）

於東塔阿弥陀房。自少
年学秘密教両界三
部別尊秘法護摩灌頂
梵字悉曇莫不窮。源
写窮慈覚之寶瓶。又

（二丁裏）

就東寺明師景雲阿闍
梨受彼宗灌頂大道。
就中於神王法者読流
十三家同傳之。以為已心重
寶　為筥底亀鏡。於茲

右縁起　延暦寺阿闍梨傳燈大法師位皇
慶　俗姓橘氏。贈中納言廣相郷曽孫也。
生而神霊　幼而能言。七歳初登叡山　住於

東塔阿弥陀房。自少年学秘密教両界三
部別尊秘法護摩灌頂梵字悉曇莫不
窮源写窮慈覚之寶瓶。又東寺明師

景雲阿闍梨受彼宗灌頂大道。就中於神王
法者　諸流十三家同傳之。以為已心重寶　為

筥底亀鏡。於茲為顕示神威於末代利益　（二二紙）

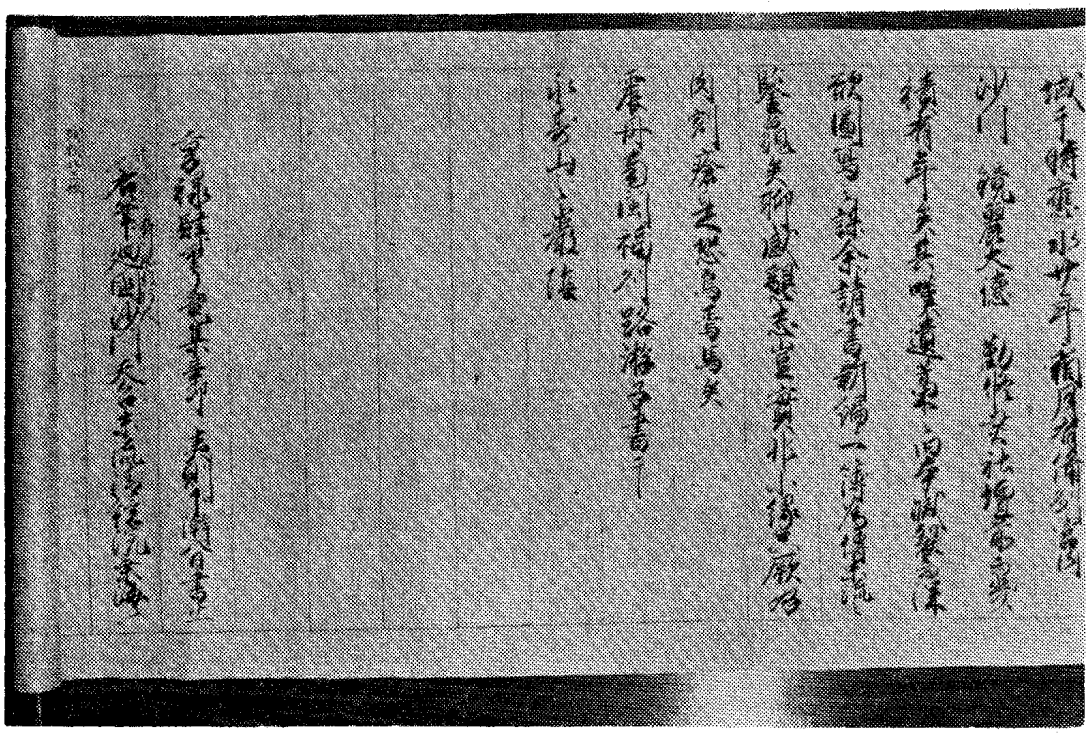
305 306 307 308 309 310 311 312 313

（以下欠失）

萬民故　訪問慈覚大師之舊儀　遍尋諸
神之遺跡披古記　成此縁起。于時春秋七十七。
永承二年己亥七月廿六日丹波国於池上房
所撰記也。以縁起法印前権大僧都澄盆心
傳明神法印。法印付忠舜法印。法印授
倫忠律師。倫忠付道誉。々々付詠海。
々々授真勝。真勝授隆信云云

（二三紙）

縞以相州江嶋縁起者統劫初之踪磧題
太古之風規矣。其天女之慈化撫育黎民
海龍之威神鎮護国家　諸聖之人師顕于
道徳　於霊區大地之蠢類開于心華於佛
域。于時應永廿年霜月有備州宮内
沙門鏡麗大徳　勤修霊社壇前　而幾



（江島神社蟹江島縁起巻尾）

積有年矣。其嘆遺藁之旧本滅裂而深
欲図写之謀。余請書新編一簿為傳末流之
鑒亀矣。聊感懇志。豈實非小縁。只厥好
肉刻瘡　是恐烏焉馬矣
震丹南閩福州路游子書于
永寿山之巖陰

享禄肆季竜集辛卯夷則下澣八日書出

右筆廻国沙門天台末流清鏡院乗海云（九州肥後住人）
紙数廿三枚（罫外）

327　338　329　330　331　332　333　334　335

先ず、この両本の書本年代について云うならば、両本ともに原本ではない。金沢文庫蔵本は、奥書の「元亨三年九月十五日写了」は、そのままがこの本の書写年時と見てよさそうである。江島神社所蔵本は、同じく写本ながら、それよりは可成り新らしく、中世末または近世初期の写本とみられる。これについての客観的資料として、岩本院所蔵の『江島五巻縁起』がある。それはこの真名縁起とほぼ同質の料紙を用いて居り、書写年代は、その絵風、描線、着彩などから、天文頃とも推定されているのである。而して、両本の内容を比較したところは、右記のとおりであって江島神社本は新写ながら、首尾完全であり、金沢文庫本は古写ながら、首尾に相当の欠落と乱丁がある。

まず、金沢文庫蔵本の欠落および乱丁の部分について検討すると、この本は初丁裏二行の「傳統大法師位皇慶、俗姓橘氏」云々と、皇慶伝からはじまるが、四丁表から四丁裏に読みついだ段階で、矛盾があることに気づく。というのは、そこに「大同元年丙戌八月帰来本朝、啓秘密之間、弘大日之化、爰」(四丁表四-五行)弘仁五年甲午春二月上旬為」(四丁裏一行)云云とあるが、皇慶は一〇世紀の人であって、大同、弘仁の交よりも二世紀あまり後の人である。而もこの縁起に、登場する人物は『江島縁起』によれば、役小角から泰澄・道智・空海・圓仁・安然と云う順序で暦年順に叙述されており、且つ皇慶はこの縁起の編者に擬されているのであるから、最後に登場して来るのが自然と考えられる。然るに金沢文庫本の『相州津村江之島縁起』では皇慶伝が最初に出ている。そこで、その初丁裏から四丁表までの二九行文を江島神社本『江島縁起』にもとめると、三〇五行から、三一三行までに、金沢文庫本の初丁裏から二丁裏まで一五行までの同文が、皇慶伝の初頭に見出される。そして二丁裏五行目最後の「於茲」は「於茲為顕示神威、於末代利益萬民政」云云と続いている。また金沢文庫本は、初丁裏がこの丁に限って四行で、「傳燈大法師位皇慶」から起こっているが、『江島縁起』では、その前文に「右縁起、延暦寺阿闍梨」と九字が冠されている。この九字は、『相州津村江之島縁起』ではちょうど一行分に相当する。そこで現装禎をよく見ると、最初の一行が失なわれている紙痕が認

められる。この縁起の現装禎は、一見して本来のままでないことがわかる。何時の頃か、今よりあまり隔りない頃にこの縁起の所有者が、首尾が欠失していることを知り、それをどうにか辻褄をあわせるために、初丁裏の二行が偶然にも「伝燈大法師位皇慶」から起こっていたのを幸いに、いたみかけていたであろう一行を削除して、あとは乱丁のままを綴り合わせたであろうことが考えられる。

ついで金沢文庫本の三丁表の「阿闍梨、六月上旬入学法」以下はどうかと云えば、これは『江島縁起』の、一四三行「遷青龍寺恵果阿闍梨六月上旬入学法」以下に相当し、弘法大師空海行跡半ば以下の文章であることがわかる。それのあとに慈覚（津村江之島縁起九丁裏〜二〇丁表　江島縁起一七〇行〜二五六行）、安然（津村江之島縁起二〇丁表〜二七丁表　江島縁起二五七行〜三〇四行）の行跡が続くのであるが、金沢文庫本は、安然の行跡は二七丁裏の五行目の「是則辨才天所産十二神王也」で終っている。それを江島神社本では、そのあと阿闍梨皇慶が江島霊窟参籠の行歴が続いている。さきに述べたように、金沢文庫本は、皇慶の伝記を乱丁のまま巻首に移してしまったので、形の上では、これで完了したかたちに見え、而も巻首は都合よく「伝燈大法師位皇慶」に起るように工夫出来たので、書写奥書を二七丁裏に付けて、一見、首尾完全に見える一巻に仕立てあげられたのである。

両本縁起をここまで比較してくると、その原本は必ずしも同一本であったとは云われないとしても、同一系統本であったことは誤りないように思われる。とすれば、江島神社本『江島縁起』は、その内容においては完全と判断出来そうである。そこで、いま仮りにこの『江島縁起』を形の上での底本として『相州津村江之島縁起』を比較すると、後者は、さきの皇慶伝前一丁半を安然伝のあとに附けても、なお一三二字分を欠いていることになる。ところで、この『相州津村江之島縁起』は半丁五行で、五〇字乃至五五字ほどの字詰になっていることから、欠落分一三二字は一丁半に相当する。そして、最後の余白半丁を書写奥書で埋めたとすれば、現在の装禎における二七丁裏の奥書は、二

九丁表となり、その裏は余白となる。

つぎに、さきに言い残した空海行跡の欠失分、及びそれの前の道智、さらに泰澄、役小角の参籠記、及び天女降臨記等がある。まず空海の行跡をみると、同記は『江島縁起』によると、金沢文庫本は三丁表、「阿闍梨六月上旬入学法」の前文二一二字分（一三一～一四三行）を欠いていることになるが、この欠字数を、同本の丁数に計算すると、同本は、半丁がおよそ五〇～五五字と概算されるから、「二一二字」は約「二丁と一行」に該当する。さらにその前文をこの計数で概算すると、泰澄、道智記（九八～一三〇行）は「五二〇字」で「五丁二行」、役小角記（五一～九六行の）「七三四字」は七丁三行」に相当し、巻首の深沢湖及び五頭龍。天女降臨伝説（一～五〇行）についての「七八八字」は「七丁半と四行」が計出され、それの合計は「二二丁半」となる。そのうえに字数足らずの行を考慮すると、その欠失分は約二三丁となろう。かくして、若しこの『相州津村江之島縁起』を復元するとすれば、前文欠二三丁、現存二七丁半、末尾欠一丁半、合計五二丁本が想定される。

他方江島神社本『江島縁起』は、そのあと三行の行間を置いて、三二一行から三三二行まで一二行にわたって、応永二〇年（一四一三）霜月に備後国宮内の沙門鏡麗大徳が、皇慶所撰の遺藁旧本が滅びんことを嘆じて書写をはかり震丹南閩福州路游子某がその後をうけて、永寿山の巌陰で書写した旨を記している。但し、皇慶所撰の旧本が何地に秘蔵されてあったかについては、ただ「勤行霊社壇前、而幾積有年矣」と、沙門鏡麗が行状を伝えるだけである。尤も、この縁起は、さきの皇慶記によると、彼は神威を顕示し、末代に萬民を利益せんがために、慈覚の旧儀を訪ねて諸神の遺跡を遍り、あるいは古記を披いて、この縁起一巻を成就した。時に永承二年巳亥（一〇四七）七月二六日、皇慶七七歳であった。[註一] 所撰の地は「丹波国於池上房」とある。それ以後、この縁起は澄憲・明神・忠舜・倫忠・道誉・詠海・真勝・隆信已下と伝授された旨を記録しているが、鏡麗が需めたまでには相当の年歴を閲しているので、

隆信以後、誰人の伝授本であったか、また旧本のままであったか、或いはその後の写本であったかはわからない。しかし、その当時、まさに滅びんと憂慮されるまで傷んでいたのであるから、或いは原本そのままであったかも知れない。また金沢文庫本『相州津村江之島縁起』は、その原本の題名は別として、書写年代は「元亨三年九月十五日写之了」という奥書が信じられようから、それの原本は、「隆信」が伝授本であったかも知れない。因に、いま江島神社本『江島縁起』は、皇慶がこの縁起成就の年を「永承二年己亥」とあったが、それは「永承二年丁亥」の写誤であろう。

『江島縁起』はそのあと三行間を置いて、三二一行から三三二行にわたり、応永二〇年（一四一三）霜月、備州宮内沙門鏡麗大徳が某霊社の壇前に勤行の砌り、皇慶遺藁の旧本が滅びんとするを憂い、震旦南閩福州路游子某とはかり、永寿山の巌陰で書写せしめたことの奥書があるが、それは金沢文庫本以後のことである。さらに、そのあと四行間を置いて「享禄肆季竜集辛卯夷則下澣八日書出」「右筆九州肥後住人　廻国沙門天台末流清鏡院乗海〻」と二行の奥書がある。いま江島神社本は、この奥書そのままの乗海が書写本とはにわかに断じ難いが、たとえその写本であったとしても、享禄四年をあまり降らないころの写本と思われる。なお、『新編相模国風土記稿』は岩本院什宝のなかに江島縁起一巻を挙げて「巻末に肥後国天台沙門清鏡院住乗海享禄四辛卯年書之とあり」と証しているが、けだしそれは、いま江島神社蔵の真名本であろう。

従来、江島縁起は、近世以来、江の島の出現、また江島神社の祭祀を説明するためにしばしば引用されてきたが、その多くは真名本ではなく、仮名縁起に拠っている。真名縁起が引用されたとみられる例は『日蓮聖人註画讃』が古い。その巻第三「龍口頸座難」の条に、龍口山の前面が鎌倉時代、しばしば罪科人処刑の場に当てられており、日蓮もまたその一人に擬せられたが、それはもと泰澄が一心精進の法施に感じて、龍口明神が「若有背国者時、斬頸懸我前。是非昔日凶執。捨其累賊、四海内平云云」と示されたことに由来する旨を明かしているが、それは真名本『江島

縁起』の泰澄記九八～一一五行の略出である。その後真名縁起が引用された例として『新編相模風土記稿』がある。それには龍口明神社の鎮座由来に引用しているが、しかもその全文を『日蓮聖人註画讃』に拠っており、「此説江島縁起にも見ゆ」と附言している。しかし、その江島縁起とは、或いは仮名本を意味しているかも知れない。また同書は龍穴の説明等に安然記を多用しているが、『江島縁起』とはしていない。と云うことは、『新編相模国風土記稿』の編者は、その当時、真名本の存在を認めながら、その内容を詳しくは閲覧しなかったのではなかろうかとも推察されるが、また事実、江戸時代には真名縁起はいまだ一般には知られていなかったようでもある。而して、ここにはしなくも真名縁起の全文を明らかにすることができたわけである。

ついでに仮名縁起について私見を述べてみたい。これに二本ある。江島神社蔵『江島縁起』五巻と岩本楼蔵『江島五巻縁起』五巻がそれである。近世以来ひろく江島縁起として知られているのはこの二本のうちのどちらかであってその後に編述された江島縁起の類いは、多くがこの仮名縁起に拠っている。江島縁起について『新編相模国風土記稿』は「岩本院什宝」のなかに「江島縁起五巻」を挙げて「大草紙に延暦寺皇慶作とあり、画は土佐なり」と註し、さらに「東国紀行にも御縁起の趣天神顕れ、地神天下りの作出せる島とぞ云々と見えたり」とも附言している。しかし「延暦寺皇慶作」と云うは、前出の真名縁起の飜意に成ったことは明瞭で、その成立については、奥書など手がかりとなる確かなものはない。また「画は土佐なり」とあることについて、現存の岩本楼蔵本に見る限りでは、或いは画は雲谷風の筆法であり、したがって、その製作は天文頃まで降るものではなかろうとする説がある。それについて黒川真頼は、その編著『増補考古画譜』[註二]につぎのような諸氏の説を挙げている。曰く

江島縁起　五巻

書画筆者未詳。相模国江島辨財天縁起。（下坊所蔵。碩鼠漫筆云、岩本院蔵）

新編鎌倉志云。江島縁起五巻。詞書作者不レ知。絵ハ土佐ナリ

〔補〕古画目録云。江島縁起。住吉家絵本

〔補〕古画類聚目録云。江島縁起絵

〔補〕春村曰。詞書の筆勢は源光行ならん、とおもはるゝものなり

貫雄曰。此の縁起原本は既く失などしけん。現存せるものは、中古の摹本ならん。と住吉弘貫いへりき。

躬行曰。丙寅四月江島にものせる序に。この縁起見まほしくて。下坊にものめさせけるに。答けらく。近年岩本院と事を争ひて。問注所に訴へまをしゝをり。便宜につきて。此縁起を奉行のもとにもて出しかば。やがてとどめおかれぬ。さるほどに火出来て。かの奉行の館やけぬる。すなはち。縁起も灰燼となりぬ。といひおこせしはいとあたらしうをしかりき。そもそも此縁起。鎌倉の末の頃などに。いできけんとおもはるゝ口気にて。源光行の筆ならんとおもはるゝ文勢なり。と春村翁いへりき。

この『考古画譜』の記事について、既に是沢恭三氏[註三]が批判するところがあった。この仮名本『江島縁起』を引用したうち、近世において最も早いのは『新編鎌倉志』である。そして同書は岩本院宝物をあげているが、そのなかに『江島縁起』五巻がある。また『碩鼠漫筆』が『江島縁起』五巻として岩本院本をあげている。この漫筆は安政六年（一八五九）黒川春村の自序があり、『新編相模国風土記稿』よりは二〇年ほど後のことであって、彼が『江島縁起』を評して「詞書の筆勢は源光行ならん、とおもはるゝものなり」と云っているのは、岩本院本を当面の対象としてであったろう。而して、その詞書の作者について、「その筆勢は源光行ならむ」としているのは、源光行の著といわれ

る『海道記』に、江の島に関する記事があって、そのなかに、江島縁起に見える、道智の参籠にまつわる伝説（江島神社本真名縁起一二〇行～一三〇行）が記るされているところから想像したことであって、[註四] それ以外には仮名縁起をもって源光行作とする依憑は無く、むしろ『新編相模国風土記稿』の編者のように「詞書作者不知」とするのが正しい見方であろう。ただ『海道記』は貞応二年（一二二三）頃の作とされているので、その記事から、そのころ既に江島縁起に織りこまれているような伝説が一般にも口承されていたことを知られるのであるが、而もそれは金沢文庫本の真名縁起が筆写された元亨三年（一三二三）よりも一〇〇年前のことであるところから、それとこれと併せもって、真名縁起を永承二年（一〇四七）皇慶作とすることには問題があるとしても、貞応以前、永承以後という、少くとも鎌倉時代以前に成ったものとする考え方は可能となるであろう。若しもその編述期が鎌倉時代にまで降ると仮定するならば、寿永元年（一一八二）源頼朝が奥府藤原氏調伏のための江島での祈願、文覚が江島霊窟参籠の事実を、この編者は見のがす筈はなかったであろう。[註五] 因に『考古画譜』の編者黒川真頼は春村の後嗣である。

つぎに、貫雄の言として、住吉弘貫が言に、「この縁起原本は既く失なわれて、現存のものは中古の摹本ならん」とあるが、これは岩本楼現本についてのことと思う。住吉弘貫は土佐派の画人で、文久三癸亥年（一八六三）に歿しているから、弘賢は文久三年以前に岩本楼本を見たわけである。本宮躬行が江島縁起を見ることを含めて江の島詣でしたのは「丙寅四月」とあるから、弘貫が歿して三年後の慶応二年であった。躬行は、何故か、下ノ坊を訪ねている。ところが、江島縁起は、岩本院との係争の参考書類として問注所に提出中に、たまたま奉行館の火災で焼失してしまったということで、目的をはたせなかった。その焼失した縁起というのは、その文面から、下ノ坊蔵本であったと思われる。とすると、その当時、下ノ坊は岩本院とは別に江島縁起を所蔵していたことになるが、それがどの種の縁起であったかはわからない。さきに黒川真頼が『江島縁起』に「下坊所蔵」と註したのは、その意をうけているも

のと解釈される。真頼はまた別に「碩鼠漫筆云、岩本院蔵」と註しているが、それは、下坊所蔵本とは別に岩本院蔵本があったことを指している。岩本院は、いま旅館岩本楼の前身であるから、岩本楼現蔵の『江島五巻縁起』がそれであることは疑いなかろう。したがって、かつて河井恒久が観たのはこの本であり、後に住吉弘貫が批評しているのも、いまの岩本楼蔵本であったということになろう。

岩本楼所蔵の『江島縁起』は巻子装禎の五巻本で、各巻ともに題簽に「江島五巻縁起」と墨書され、詞書は仮名交り文で、その内容は、真名縁起を潤色し、最後に慈悲上人が参籠して、下之宮を造営した行跡を附け足し、各巻ともに、説話文の進行にしたがって、適当に段切りし、各段＝詞書の数倍、時には十数倍程の長い挿絵を挿入してあった。

第一巻詞書。絵、詞書。第二巻詞書。絵、詞書。絵、詞書。第三巻詞書。絵、詞書。絵、詞書。絵、詞書。第四巻詞書。絵(1)絵2絵3、詞書、絵(1)絵2。第五巻詞書。絵、詞書。絵、詞書。絵、詞書。

という構想である。全五巻の全長は、楢崎宗重氏が量尺では一三九尺五寸三分、そのうち絵は九二尺三寸九分と示されている。

その成立した時代については、さきにも言及したが、その素本である真名縁起の成立期を根底として考慮しなければなるまい。真名縁起が成立した時代については、一一世紀中葉に天台僧皇慶作とされているけれども、いまだ確実とは云え得ず、しかし一二世紀後半の、源頼朝時代以前に成立していたろうことは推定できるから、仮名縁起はそれ以後の成立ということになる。而もさらに慈悲上人（良真）の行跡がつけ足されている事実も考慮しなければならない。と云っても、黒川真頼が云う源光行の作とすることには同意しかねるが、岩本楼本の挿画にみられる人物の服装等からも、「鎌倉の末の頃などにいでけんとおもはるゝ口気」と云う推察には、一応、留意してよろしかろう。

つぎに、岩本楼本そのものの成立については、さきころ楢崎宗重の研究がある。[註六] 楢崎氏はそのなかで、さきに『考古画譜』に紹介された住吉弘貫が同縁起は原本は既に失なわれ、中古になっての摹本であろうとの説に対して正鵠を得たものである」、と評価して、自らもその理由とし、「絵は多少の大和絵風もないではないが、一見感ぜられる画風の特徴は雲谷風である」こと、また「木石工坡等に用ひられた筆墨の線描は、強く粗剛であって、漢画の手法を明らかに示して居」り、「色彩はあまり密でなく、また印象的な着彩には一種の丹緑本的な趣味が感ぜられ」ること等の観点から、「天文頃まで降るものではなかろうか」と判断している。線描、着彩ともに粗放で、なお未完成の感すらあり、ことに所々に見られる大胆とも思われる朱描線が目立ち、それらが楢崎氏をして、一種の丹緑本的な趣味を感ぜしめ、奈良絵の趣きすら散見すると言わしめた所以ともなったことであったろう。

その詞書の筆者については、楢崎氏は触れるところがなかったが、岩本楼に所蔵される『江島縁起』の添状、折紙のうち、明治七年古筆了悦が「猪苗代法橋兼戴真蹟」とした折紙一通[註七]があって、これの添書と考えられる。兼戴は連歌師としても知られ、式部大輔源盛実の子で、堯恵に従って古今の伝授を受け、北野会所の別当に補せられ、法橋に敍せられた。連歌を心敬に受け、応仁のころは京都の乱を関東に避け、一時蘆名氏の会津城下に留まり、文亀の頃（一五〇一～〇三）白河関近く草庵を結んでいたが、宗祇の死を聞いて相州湯本に来たって長歌を詠じたなどが知られる。その死は永正七年（一五一〇）と伝えられるから、時代的には、楢崎氏が絵についての推定年代と、矛盾しないようである。

この縁起絵巻は、巻子はその天地幅外軸とも36.0cm、料紙は楮紙様のもので幅34.3cmを計るが、天地を僅かに切り落しているようである。それは、もと生地のままで展示、閲覧したために、天地を損じたので、後年に裏打ち装禎し

た際に、そのように措置されたと思われる。詞書、絵ともに無野で、現形では、各行の天地各々1.5㎝の余白を残している。

容筥は江戸時代の作製にかかり、長方形の深底型で、極墨漆塗り、蓋、身ともに四隅を透し彫の真鍮金具でかため蓋表書に金泥で『江島縁起五巻』、また底裏に朱漆で「塗與兵衛」とある。規格は、縦43㎝、横22.4㎝、深さ18.2㎝で、内に別の内筥を容れて二段とし、上下六巻を納められる仕立てである。

江島神社所蔵本は、同じく巻子五巻から成り、各巻題簽に『江島縁起』とある。その筥表書に「江島縁起　詞三條左府実秀公　画狩野與也筆　五巻」、蓋内に「雅信誌印」と落款がある。また別に「江嶋縁起絵巻物」の折紙があるが、そのうち古筆了悦と狩野勝川雅信の二通がこの縁起に添えられたものと判断される。[註八] 狩野勝川雅信は、これに箱書した雅信である。彼は、養信の長子で、素尚斉、また勝川院と号し、狩野八世の画人として知られ、法印に叙せられ、明治一三年八月、年五八をもって没している。はたして雅信が箱書並びに添状[註九]とおりとするならば、詞書の筆者三條実秀は従一位左大臣に任じ寛文一一年（一六七一）八月二五日、七四歳で薨じ、絵師狩野與也は刑部・伯甫等と号し、法橋に叙せられ、寛文一三年（一六七三）四月卒しているので、両者年時上の矛盾はない。また同縁起の詞書の書体、紙質からも、およそその頃のものとして齟齬しなさそうである。詞書の内容はさきの岩本楼本にほぼ同様であるが、全文総仮名であることは、それをより広く来信者に知らしめるために、これを作成するに当って、ことさらに総仮名文に書き改めたものであろうが、その元本は岩本楼蔵本に拠ったとは必ずしも断定できない。かつてこの縁起第一の軸木に墨書があり「安政三丙辰年八月八日深川八幡ニ而開帳、同月廿五日夜五ツ時分大風雨ニテ津浪押揚、塩入ニ相成、是仍而再修覆致候者也　浅草すハ町　経師　関源蔵」と読みとれたと云われるが、このことは、その当時、座開帳、また出開帳の場へはこの絵巻を展示し、来詣の善男女に江島弁財天祭祀の由来を絵読みに語り聞か

せたことを裏付けていると考えられるのである。とは云うものの、両本全同ではなく、詞書を詳細に点検するならば僅かながら幾所か異なる個所が散出される。ことに絵においては、描写の場面、出現の人物等、大筋の構図では岩本楼本にほぼ一致しながら、表現・描写の点で異なるものがあるのは、絵師の個性上の問題として片つけるわけにはいかないようである。ことに気になるのは、両本の間に段切れの違い。したがって絵のコマ数に相違がみられることである。

第一巻詞書、絵、詞書。絵(1)、絵(2)。第二巻詞書、絵、詞書、絵、詞書。第三巻詞書。絵、詞書。絵、詞書。絵、詞書。絵、詞書。第四巻詞書。絵(2)絵(2)絵3、詞書。絵(1)絵(2)。第五巻詞書。絵、詞書。絵、詞書。絵、詞書。

第一巻は、詞書は両本ともに二段は区切られ、岩本楼本は、その間に全巻にわたる絵を挿むが、江島神社本は、そこでは長湖に棲む悪龍のみを簡単に描写し、第二段後に全巻にわたる絵を出している。また第三巻では、岸本院本は詞四段、絵三コマ、江島神社本は詞五段、絵四コマである。そして岩本院は役居士・泰澄・道智、そして道智に傷つけられた龍女、龍女の怒り、と段つけされ、その間に詞書相応の絵を挿入しているが、江島神社本は泰澄と道智とを別段に取扱っているので、勢い、詞五段、絵四コマになっている。

江島神社本は詞書を三條左大臣実秀の真蹟と称するほどに、豪華な仕立てである。巻子は、天地幅、外軸とも27.5㎝、料紙は上質の紙を用い、その天地幅35.5㎝、詞書は全文を界線ともに金泥単罫の框でかこみ、框は天地幅29.5㎝、行間2.5㎝で、天3.4㎝、地2.3㎝の余白には金箔を散らし、絵は天地とも無罫で全幅面に描き、且つ主要人物名を仮名書きで傍記している。全巻の長さは計らないが、第一巻では約一〇米をはかった。

現在の容筥は、蓋表に「相州江之島　江島神社宝物」、その内書にみられるとおり、最近の調製品である。その元筥は岩本楼にある。この縁起を作製した間もない頃の調製であろう。浅底型で、蓋身とも四隅と中間を透し彫の真鍮

金具で固め、縦41.8㎝、横38.9㎝、深さ12.1㎝、身は内部を五巻用に仕切り、外内とも全極漆塗で、蓋の表に狩野雅信が金泥書きしている。

序でをもって仮名縁起の各巻の内容を要略して記るし、且つ各段末に、真名縁起の該当個所を括弧内に示した。詞書は岩本楼本に拠った。

第一巻

(詞) 武蔵相模の境、鎌倉海月のあひたに長湖あり、これを深沢と云う。そこに五頭の悪龍棲み、神武、垂仁御宇の間、病痾乱逆をなし、さらに景行、安康天皇の御宇にいたりて一そう暴悪をたくましうするにいたる。

真名本、一行～一六行、金沢文庫本では欠失

絵

(詞) 武烈天皇の御宇、五頭龍、金村大臣に託して郷党に患いし、谷津村の湊に出没して人の兒をくらうなどの暴悪をなす。そのため村人怖れ、旧宅を離れて他所に移る。

(真名本一六行～二九行、金沢文庫本では欠失)

註。江島神社本はここに絵を置いている。

第二巻

(詞) 欽明天皇御宇貴楽元年四月一四日戊尅より二三日にわたって、暗雲蔽うて大地震動し、その間、雲上に天女、二童子、天衆龍神等にまもられてあらわる。この後蕩雲おさまりて忽ちに海上に一島出現す。これ江の島なり。この島は奇特の地勢、勝絶の妙痕にして、仙人はここを栖とし、弥陀有縁の教主はこの島に来って生を導びき、善神は一切の福をさつけ、悪神は万里の禍を攘うところなり。これ実は弁才天の無量無辺不可思議の功徳の一つの現わ

れなり。

（真名本二九行〜三八行。金沢文庫本では欠失）

絵

（詞）島上に降居せし天女は、弁才天女の応作、無熱池龍王の第三の娘、閻羅大王の姉、婆蘇大王の妹なり。かくて天女はその麗質と不可思議の功徳により、遂に悪龍を化益せり。悪龍、天女の教令のままに今より以後、毒心をあらわさざることを契う。また弁才天は方便の力によりて、一島を化作せり。それ江島明神なり。

（真名本三八行〜四六行。金沢文庫本では欠失）

絵

（詞）その後湖水の毒龍永く悪害の心をとゝめ、却って慈悲の徳を施すこととなり、誓を立てゝ、利生の恵をたれ、万民を巨益せんために、南に向って山と化す。龍口山これなり。悪龍は子死方明神として鎮座せり。

（真名本四六行〜五〇行。金沢文庫本では欠失）

第三巻

（詞）役居士、葛城明神一言主の奏言により、天武天皇三年伊豆大島に配流となる。習年四月孤島に尋ね来り、西山の金窟中にとゞまりて、拝願して天女の真身彰現を祈り、専ら不動明王呪を念ぜり。第七日の後夜時分に、天女忽然として顕現せり。八臂具足の尊体は身色容儀鮮白浄潔なり。妙音をもって偈をなせり。居士歓喜合掌して敬礼稽首し、国土を安鎮し、黔黎を賑給せんために、一尺八寸の利剣を金窟第二重の内院に安置せり。これ、弁才天女が顕現せし最初なり。

（真名本五一行〜九七行。金沢文庫本では欠失）

絵

（詞）浄足姫天皇御宇養老七年春三月、泰澄大師、この島に住して大乗経を読誦し、陀羅尼を念誦し、丹誠をつくして天女の玄覧を仰げり。また毎日船に乗じて龍口山に詣り、法楽を施与して離業證果を祈る。時に龍口山の間の二池あり、泰澄連日そこに法楽して、一池には光明真言を書いて入れ、光明真言池と名つけ、他の一池には阿弥陀佛の名号を書きて入れ、阿弥陀池となつけたり。かくして日月を経る間、龍口明神、大師に対して、宣わく、われ菩薩の法施をうけて、既に三熱の苦悩を除くことを得たりき。若し国にそむく者ある時は、その頭を伐りてわが前に懸けよ。これわがむかしの凶執にあらず、黒賊を捨てゝ四海を平かにしその残唐を払いて八紘の外まで明らかにせんがためなりと。泰澄この宣をうけて、あまねく人にその旨を伝う。これ以来、逆人出づればその首を斬りて山前に懸くることはじまる。

一方、泰澄島に住して大乗妙典を行じ、一心懇篤をつくせり。秋九月十五日夜半に窟中より、綵雲起こり光明あまねく照らすなかに、天女瓢乎として化現し、天女の生身を拝するを得て、心忻感して島を出でぬ。

（真名本九八行〜一一九行。金沢文庫本では欠失）

註。江島神社本は、ここに泰澄が龍口山の岩座上に精進し、また船に乗じて江の島に詣り、岩窟の前に合掌して天女の生身を拝する絵が配されているが、岩本楼本は絵を欠く。

（詞）勝宝感神皇五年より天平六年にいたるまで、相模国餘綾部の人道智、島に居て法華経を読誦し、四運の廻転をわすれて、ようやく数部の妙典をつくす。その座に天女毎日聴聞にいたり、三農の飯をつらねて手つから供養せり。

（真名本一一九行〜一二三行。金沢文庫本では欠失）

絵

註。岩本楼本は、ここに江島神社本に見られた泰澄が天女の生身を拝する場と、龍口山の阿弥陀池と光明真言池との間に座して精進する場及び龍口山と江の島の間を渡船する場と、このような順序に絵を配している。江島神社本は、道智が江の島に居て法華経の読誦にはげみ、その座に天女が飯を連ねて供養する場を出している。

（詞）道智、毎日聴聞にいたる天女をあやしみ、その来たる所を知らんとして、藤皮を縷につらねて天女の裙にさしつけ、縷の引く跡を尋ね行くに、島の龍窟に入れり。窟中に尾につけられし針の傷みにうめく音あり、且つ法師を供養して、いまこの難にあえしことを怒れる声あり。道智これを聞き、踢躋として岩窟をとび出でぬ。

（真名本一二三行～一二七行。金沢文庫本では欠失）

絵

註。岩本院本は、ここに天女が飯を供養する場、道智が藤皮の糸跡を探って龍窟にいたる場、龍神の怒りに忽ち風波起こりて、道智を何地へか吹き飛ばす場面とを出している。また江島神社本はあとの二場だけを出している。ここで両本の絵のづれは一致する。

（詞）龍言いまだ終らざるに、暴風涙然として起こり、怒浪滔々として、その余波は四十里のところを沈め、道智は漂流して龍口山の嶺に打寄せられ、その終るところを知らず。龍女曰く、今よりのち、わが山に藤生えることなく法師住むことなからんと。その誓いの如く。大同年中まで嶋山に藤生えず、法師住むことなしと。

（真名本一二七行～一三〇行金沢文庫本では欠失）

第四巻

（詞）嵯峨天皇弘仁五年春二月、弘法大師、帝城を出でて、東海の聖跡を拝せんと、相州津村湊に泊り、孤島の奇絶

なるを見て、漁艇にて島に渡り、金窟に遙巡し、窟中に専精恭敬して弁才天の生身の顕現を祈願した。七日におよぶ寅の剋、窟中に忽如綵雲たなびき、眼前に天女の真身を拝せり。天女曰く、若し国土に諸々の災難衰悩悪病および異怨起こる時は、まづ吾が山を鳴動せしむ。専ら三部妙典を読説すれば、われ大勢神力をもって災難を消除し、また四大王衆天龍鬼神等をして国土を衛護せん、と。大師合掌恭敬して天女を称讃し、国土を鎮め、萬民を豊にせんために、自ら五指量の形像をつくり、五鈷金剛杵佛舎利を具して金窟内院の両部の中間に安置し、その下に宝珠を埋む。また東窟に両部曼荼羅を安じ、金窟の間に社壇を開けり。

（真名本一三一行～一八九行。金沢文庫本三丁表～九丁裏）

絵

（詞）文徳天皇仁寿三年春二月、慈覚大師。賢聖の玄蹤をたづねて東海に巡礼し三月津村湊に着す。島中に三嶺あり、これ方壺瀛州蓬萊をはさみて三台にかなえると感じ、舴艋に乗じて嶋に渡り、霊窟に在って専念修行すること三七日、最後の日に天女の生身顕現を祈願した。はたして後夜の時分に龍窟より紫雲わき出で、香地山に充ちて、天女の威容雲上に顕現し、妙音声を起こして曰く、国王人民を擁護し、衰患の憂いを除き、安穏を得せしめんと。大師教命をうけて心願満ち、国家安鎮のために五寸の形像を彫刻し、併わせて六寸の五鈷金剛杵をつくり、中を破って三寸の宝剣を納む。また如意宝珠、宝剣の面に梵字弁才天心中心呪を書き、五鈷の鬼目に佛舎利四粒を納めて龍窟中に安置せり。

（真名本一九〇行～二五六行。金沢文庫本九丁裏～二〇丁表。）

絵

第五巻

（詞）慈覚、国司に命じて草蓬をはらい、荆棘をきり、至妙の社祠をひらき、如在の祭祀を設く。天女はじめ西山の金窟に天降り、ここにはじめて東山に移れり。大師は叡山第三の座主、密教弘通の尊師なり。さきに、承和五年長安に留学すること六年に及べり。大師本朝に在りし時、承和二年、夢中に先師の告げをうけ、玄法寺法全阿闍梨より天部の秘法を伝え、ことに国土安鎮のため宇賀弁才天法を伝受す。

（真名本一九九行～二一八行。金沢文庫本一一丁表～一四丁表。）

絵

（詞）陽成天皇元慶五年春二月、安然和尚、慈覚大師の旧儀をたづねて、弁才天の生身を拝せんことを願ってこの山にいたり、石室に住して春秋を送れり。練行功を積み、発願して秋七月十五日寅剋に天女の生身の化現を拝し、心願満足して島を出ず。和尚は五大院の先徳第八地の菩薩、相模国星谷の人なり。

（真名本二五七行～二六四行。金沢文庫本二〇丁表～二一丁表）

絵

（詞）そもそも龍宮宇賀弁才天女は、文徳天皇第三年、慈覚大師の草創以来正治元年にいたるまで三七三年を経たり。ここに慈悲上人良真、往昔の法式をとぶらはんため、一千余日の修業を畢えり。その時、建仁二年七月十五日夜寅の尅はかりに巌窟より紫雲わき出て、光明赫変として天をてらし、金色皓然として地をかゝやかすなかに、天女壇上に顕現し、一偈を説きて曰く、吾れ末世の衆生を済度せんため、この山頂に住せしが、行者無きため、社壇墜潰せり、と。上人天女の告げの如く。かの旧跡をたづねて社壇を建てたり。

慈悲上人、元久元年二月上旬頃大唐にわたり、慶仁禅師について受法す。帰朝の後、慶仁禅師の教えにまかせて、

将軍に命じて霊跡にかさねて社壇を開けり。

註。慈悲上人良真の事蹟は真名本にはない。

絵

（詞）建文元年丙寅七月上旬、遷宮せり。社殿の荘厳至妙にして昔に超過し、爾来、国土安穏、富国繁昌してその例稀なり。かの島は関東宇賀神王の住所、本地釈迦如来、如意輪観世音の化身、一切衆生の悲母、福徳を三千世界にみて慈悲を遍法界に放布す。衆生を憐愍し給うこと、なをし一子のごとし云云。

註。この条は真名本にない。また真名本の安然和尚記、安然秘書記以下のことは仮名本に無い。

金沢文庫本『相州津村江之島縁起』は、はやく昭和三〇年、是沢恭三氏により『江島弁才天の信仰史』のなかに「相州津村辨財天縁起（真名文）一冊」として紹介されている。私は昭和四六年に『藤沢市史』古代・中世編を執筆するにあたり、江島神社の祭祀問題を考察するための史料として、江島神社の真名本『江島縁起』を閲し、あわせて金沢文庫本をプリント冊子によって知ったが、次いで昭和四八年に現本を閲する機会を得たのである。是沢氏は『江島縁起本』のうち真名本を重視して、江島神社蔵本については詳細な考察をなされているが、金沢文庫蔵本については、首尾に可成りの脱落があって、同縁起の成立など伝写につながる後尾の奥書等を缺くために、両蔵本は「内容的に別種なものでない事」、「江島縁起の真名本の編述が鎌倉末期既に成立していた事」を指摘しながら、それ以上の追求を避けたようである。私は右のような関係から、両本のプリントを座右に置くことが出来たので、両本をとくと比較することができた。そして藤沢市史執筆中、及びその後も両本の比較を、折りに触れて続けてきたが、私なりのひととおりの結論を得たので、ここにその大概を発表して大方の示教を仰ぐこととした。

真名本の成立期および編述者、また仮名本の成立期及び岩本楼本が製作された時期など、その他いまだ懸案として伏せてある幾つかの問題がある。ことに道智をもって相模国餘綾部の人とし、安然を相模国星谷の所生としているなどは、絵縁起とは別筋のことながら、見のがせない問題である。

註一　皇慶の伝は『元亨釈書』（巻五）に見え、『本朝高僧伝』（巻四九）は『元亨釈書』の踏襲にすぎない。それによると、皇慶は橘廣相の曽孫、性空法師の甥である。七歳叡岳に登り。東塔院静真に従って密宗を学し、慈覚七代の家嗣と称され、その徳望は一山を蓋うばかりであった。永承四年七月二六日滅し、寿七三であった。そのあいだ、万寿年中丹波（池上の大日寺）に在ったことを伝えるが、東国に下ったとは伝えていない。永寿四（一〇四九）年七月二六日、老いをもって示寂した。寿七三

註二　『考古画譜』巻二に記録されているが、増訂考古画譜と訂正増補考古画譜とで用語に僅かの相違がある。

註三　是沢泰三著『江島辨財天信仰史』（昭和三〇年刊）

註四　「法師はまいらぬときけば、そのこころをたづぬるに、むかし此辺の山寺に禅僧有て、法華経を読誦して夜をあかし日をくらす。其時女の形出来て、夜ごとに聴聞して、かくれば忽然としてうせぬれば、其行方をしらず、僧これをあやしみて、糸を持て、ひそかに裾につけにけり。あくる朝に糸をたゞしてみれば、海上にひかれてかの山にいたりぬ、巌穴に入て龍尾につけたり。神龍顕形して後、僧にはぢでこれを入ずといへり」（海道記）

道智法師嶋にゐて法花経を読誦す。さらに四運の廻転をわすれて、やうやく数部の妙典をつくす。聴聞のために天女毎日にいたりて三農を飯につらねて手つからこれに供養す。まことに法花読誦の功徳は今も昔のやむことなし。

かやうに毎日の顕現をあやしとおもひて、来る所をしらんかために藤皮を縷につくりて針につけて天女の裾にさしつけぬ。縷をひくにしたがひて尋行てみれば、すなはち龍屈にいりぬ。縷龍尾につけり。龍窟の中にはなはた傷音あり、またいかれる声ありていはく、龍女なんちの心かる〳〵（しく）して法師を供養していまこの難にあふていたむならし。道智こゑをきゝて躊躇してまとひいてぬ。龍言いまたをはらさるに暴風唄然としておこりて怒浪滔々たり、餘波四十里をしつむ。道智漂流せられてたゝに龍口山の巓におけり。そのをはりけんゆへをしらす。龍女笑ていはく、今よりのちわが山に藤をひす。法師すむ事なからんと。誓のことく大同年中までは嶋山に藤をひす。また法師すむ事なし。（江島五巻縁起）

真名『江嶋縁起』『江島神社本では一一九行〜一三〇行にこの記あり。

註五　源頼朝が江島参詣を併せて鎌倉開幕以来将軍家以下の信仰、祈雨の修法等を記るさず、ただ良真慈悲上人の事歴のみを巻尾に増補しているのは、この縁起が仏者の編纂に成ったためであるとする説があるが、私はこの説は採らない。

註六　国華第七二四号（昭和二七年七月）所載、楢崎宗重「江島弁才天像及び江島縁起絵巻に就て」

註七　袋書に「江之嶋新縁起　折紙　古筆了悦」とあり。

江嶋縁起絵巻物　詞書　古に天地

猪苗代法橋兼載真蹟無疑者也

明治七暦抄冬中浣　古筆了悦印

註八　いまこの縁起は縁起五巻と容筥・添状とが、江島神社と岩本楼とに分かれて所蔵されているので、容筥及び添状は岩本楼所蔵によっている。

註九　袋書に「江之嶋新縁起添状　狩野勝川雅信」とあり。

江島縁起之図五巻致一覧候所狩野興也正筆二而候事

甲戌　狩野勝川

十二月十九日　雅信（花押）

また詞書について古筆了悦はつぎのような折紙をつけている。

折紙

江島縁起絵巻物

詞書いにしへに天地

三條左大臣実秀公芳翰無疑者也

明治七年

抄冬下浣　古筆了悦印

註一〇　「神宝五巻天下奇品也、余史事全国漫遊之際明治三十五年参詣拝観、応社司之清需函書。今茲大正十年五参拝之節進書待国宝鑑査、帝都賜菊園学会長藤野静輝印」（筥内書）